



佐々先生の 海外・帰国 あれこれコーナー

このコーナーでは、いろいろな立場の人たちの声を聞きながら、特に海外に住んでいる保護者の方々に役立てていただける情報や、参考になる考え方などを提供していきます。

取り上げてほしいテーマ、ご意見、ご感想などをお知らせください。皆様の声を聞きながら、このコーナーをできるだけ実際に役に立つものにしていきたいと思っています。連絡は、Eメールで、sasa@keimei.ac.jp までお願いいたします。

啓明学園中学校・高等学校 校長 佐々 信行（さっさ のぶゆき）

ハンブルク補習校、帰国子女受け入れ担当（横浜市）、日本語イマージョン・プログラム教諭（バージニア州）・ワシントン補習授業校を経て、現職。

戦争の記憶

私が教員になったころ、小学生に「戦争の時の生活の様子をお父さんやお母さんに聞いてみましょう」という課題を出すことがありました。それが「おじいさんやおばあさんに」となり、「もしもそのころのことを知っている人が身近にいたら」と言わなければならなくなりました。今は、直接戦争の話を書く機会はほんとうに限られています。

今年の夏は、テレビで、戦争を体験した人たちがやっと重い口を開いて記憶を語る場面を何度か見ました。思い出すのもつらい出来事を語ることができるようになるには、長い年月が必要なのかもしれません。

◆ 父の話

私の父は、陸軍の中隊長で、南太平洋で戦っていました。若いころはあまり戦争の話はしませんでした。それでも私は二つの話を聞かされていました。

一つ目は、弾が胸に当たったときのことです。「やられた」と死を覚悟したところが、弾は出征前にお寺の住職にいただいて肌身離さず身につけていた仏像に当たっており、命を失わずにすみました。ところが、帰国したとき気がつく、仏像が見あたりません。申し訳ないことだと住職に謝りに行くと、住職は

「仏さんが、あなたを生きて帰らせることができ、仕事を果たして帰って行かれたのですよ。」と言われたのだそうです。

二つ目は、不思議な胸騒ぎの話です。ある窪地で野営をしていたところ、突然不安でたまらなくなりました。部下たちは疲れ果てて眠りこけていたのですが、どうしても我慢ができなくなり、副官の反対を押し切って兵を起し、移動させました。すると、未明に、前にいた場所が激しい空襲に遭いました。もし移動していなかったら全滅するところだったのです。なぜ急にそんな気持ちになったのか今でも分からないということです。

二つとも、それぞれ命がけのたいへんな話ではありますが、どちらかといえば、幸運に恵まれて生還できたことへの感謝の気持ちが感じられる語り口でした。

聞かされていない苦しいことはたくさんあったのだろうと思っただけに、最近になって、父から、「時間があるとき読むように」と封筒を渡されました。中には1枚の紙が入っており、いくつかの短歌が書かれていました。戦場にいたときの様子を表したもので、一発撃てば千発の返礼があるという圧倒的に不利な戦況で、補給を絶たれて飢餓の苦しみにあえぐ部隊の様子がえがかれていました。そのうちの二つをご紹介します。

「転進時神の恵みか蛇のあり一切れずつ分ちて食う」

「ブァンと自決する音こだまする屍の経をわれらたどらん」

父は、短歌につけ加えた短い文章をつぎのように結んでいます。

「悲惨なりカ号作戦。ラバウルまで600キロ、ジャングルに大湿地。残余の生存者は一名も落とすまいと叱咤して征く。飢餓には勝てず、力は及ばなかった。今にして想う、自分を見つめて。指揮者の一員でなかったら、私は早々に何処かで没していただろう。えらかった（広島弁で「つらかった」の意）、苦しかった。」



平和の日礼拝